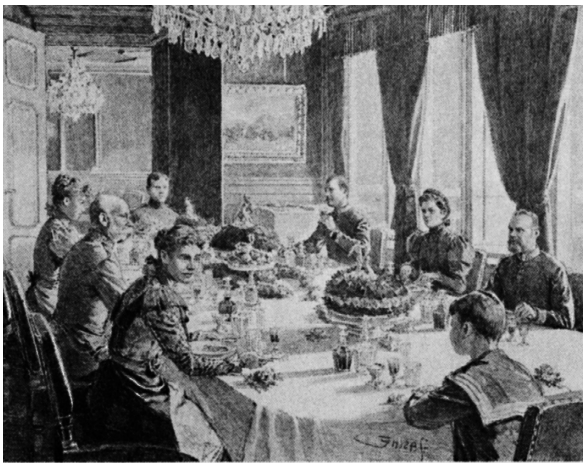


皇妃エリーザベトのプライベートな昼食風景（1891）
フランツ＝ヨーゼフ皇帝（左から２番目）ならびにエリーザベト皇妃（テーブル窓側中央）やエリーザベトの最愛の娘マリエ＝ヴァレリエ、エリーザベトの生家バイエルンの大公夫妻と皇太子達が食卓を囲む

喪服姿の皇妃の肖像
1889年の皇太子ルドルフの自死後、エリーザベトは、生涯喪服で通した

● Ingrid Haslinger
（イングリッド・ハスリンガー）
ウィーンに生まれる。
ハプスブルグ家宮廷の儀式やテーブルマナー、銀器食器類を研究。1987年『帝国のテーブル文化』、1998年『シシーの食卓』、2001年原著を執筆。

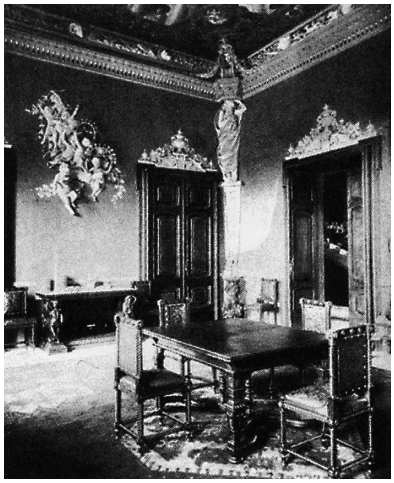
● 宇野佳子
筑波大学大学院修士課程地域研究研究科ヨーロッパ研究修了。専門分野は言語文化。

食卓の喜び 第5回

AUGENSCHMAUS UND TAFELFREUDEN（目のご馳走と食卓の喜び）より

著　者　Dr. Ingrid Haslinger
訳　山下満智子（大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所）、宇野佳子

皇妃エリーザベトのギリシャ コルフ島のヴィラ「アキレイオン」の食器によるディナーの食卓



皇妃エリーザベトがポンペイの廃墟などからアイデアを得たヴィラ「アキレイオン」の内装

皇妃エリーザベトの食卓のスタイル

ハプスブルク家の美貌の皇妃エリーザベト*（1837–1898）は、ウィーンの厳格な宮廷生活を嫌った。本論では、その皇妃エリーザベトの独自の食のスタイルを紹介する。

*Elisabethのドイツ語原音に近い表記

ウィーン宮廷とエリーザベト

皇妃エリーザベトは、若さとその体型を永遠に保とうと、約50キロという自らの理想の体重を維持するために、数日にも及ぶ断食を繰り返すなど食生活に問題をかかえていたが、食卓において自分のスタイルというものを持っていた。しかし、シェーンブルン宮やイシュル宮などウィーンの厳格な宮廷生活では、宮廷銀器室の食器の使用が決められていた。そのため食卓にエリーザベトの考えを存分に発揮できたのは、ごくプライベートな範囲に限られており、長い間エリーザベトは自分の食器すら持たなかった。フェルディナント前皇帝の妃であるマリア=アンナ皇太后の死後に相続した銀製の旅行用食器、トゥーン工房の陶磁器類、マイヤーホーファー&クリンコシュ社の分厚いガラス食器類や銀食器類は、「ウィーン宮廷好み」そのもので、まったくエリーザベトの好みではなかった。そのことは、夫君フランツ=ヨーゼフ皇帝への贈り物としてエリーザベトが選んだ、ウェッジウッドやミントンのイギリス製の食器がよく示している。

皇妃エリーザベトの肖像（1865）

エリーザベトの食のスタイル

皇妃は、1890年代、すなわち死のわずか数年前になって、ようやく自らのイメージにふさわしい食器を購入した。厳格なウィーンの宮廷生活を嫌っていたエリーザベトは、しばしば長期の船旅に出かけ、船ではその食器を使用した。エリーザベトが選んだ食器は、ベルンドルフ製の銀でメッキを施したアルパッカで、大変簡素に仕上げられており、一般に手に入れることができるものであった。ただ、王冠を被ったイルカの紋章だけが、その食器の所有者が一般人ではないことを示していた。当時は、まだ金や銀以外の食器は上流社会のものにふさわしくないとされていた。エリーザベトの持ち物であることを示す王冠を被ったイルカの紋章がベルンドルフにあの大いなる名声をもたらしたのである。

右：ハンガリーの色彩豊かな陶器と王冠を被ったイルカの紋章が刻まれたベルンドルフ製のカトラリー

下：カトラリーに刻まれたイルカの紋章

皇妃エリーザベトは、1890年代に、シェーンブルン宮の庭園の一角に農場を作らせ、そこで牛を飼わせた。皇妃の厳しい食事制限のために、生肉をプレスした汁や大量の野菜、新鮮な牛乳や乳製品、卵を必要としたからである。エリーザベトは、その農場に、ハンガリー風のサロンを作らせ、色とりどりに彩色された家具やカーテン、いろいろな種類の牛の絵を置いた。そして、そこに彼女の好みの食器を置かせ、引きこもった。エリーザベトは、ハンガリーの色彩豊かな陶器の皿で食事をし、ベルンドルフ製のカトラリーを使い、簡素なガラス製のグラスでミルクやビールを飲んだのである。皇妃は、故郷のバイエルンからビールを飲む習慣を持ち込んでいた。また、ハンガリー料理のグヤーシュを好み、皇妃専用の小さなグヤーシュ用の鍋も備えられていた。

エリーザベトは、1860年から61年に大病を患った際にギリシャのコルフ島に滞在して以来、そこに自分のヴィラを建てることを強く望んだ。夫君フランツ=ヨーゼフ皇帝は、1880年代の終わりになってようやく、妻のこの望みを叶えた。このヴィラ「アキレイオン」こそ、エリーザベトが自らの好みの食のスタイルを最も表現できた場所といえる。エリーザベトは、かつて旅行で訪れたことのあるイタリアのポンペイやヘルクラネウムの廃墟から、建築や家具調度についてのアイディアを得た。テーブルクロス類には、ギリシャ・ローマ神話のモチーフが織り込まれた。簡素で薄いガラス食器や銀のカトラリーには、ギリシャを好んだ彼女の紋章である王冠を被ったイルカが刻まれた。エリーザベトがボヘミアの陶磁器工房に注文した食器には、白地にギリシャ・ポンペイ様式の絵が描かれ、やはり王冠を被ったイルカがつけられた。

皇妃エリーザベトの、たいていの食事は、料理を別の場所にある台所で作らせ、小さな部屋で、自分一人のために給仕させた。皇妃の孤独な食事の場に同席することを許されたのは、最愛の娘マリエ=ヴァレリエだけであった。